

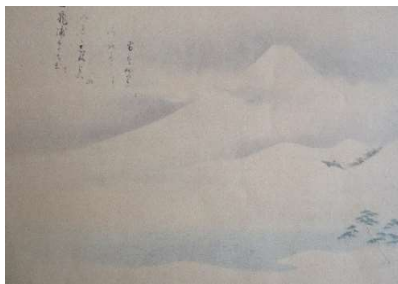
日 本 の 山 海

横山大観&竹内栖鳳らの風景画を『日本風景論』の文章と友に

松岡美術館(白金台5)前期 24. 02. 27~04. 14 後期 04. 16~06. 02(入れ替え有)



四方を海に囲まれ、豊かな山林を有する日本の自然は、私達の暮らしに恵みをもたらす一方で、時に猛威をふるってきたため、古くから“山や海は信仰の対象”とされ、身近で特別な存在であった。また、この時期、芸術家達にとって、自然の造形は格好の題材であり、多種多様な作品が生み出されてきた。本展では、当美術館の創設者である「松岡清次郎」が、“自然に見出した美しさにも「志賀重昂」の影響があるのではないか”という仮説で、日本風景画を流暢な文章とともに紹介、日本画家が描いた“山や海から日本の自然美を堪能”できる。



狩野常信《富士三穂図》右幅 江戸時代 前期

本作の他に、江戸から昭和時代に描かれた、狩野常信《富士三穂図》、橋本雅邦《春景富岳図》、下村観山《富士》など「9点の富士」の絵が展示され、それぞれの時代の日本画家が捉えた「富士山」を概観できる。



竹内栖鳳《晴海》1918(大正7)年絹本着色 後期

“西の栖鳳、東の廣業”と並び称されている。「竹内栖鳳」(たけうちせいほう)「寺崎廣業」(てらさきこうぎょう)の作品の展示では、栖鳳のモチーフを切りつめ群青の海を抽象的に描いた作品や、写生と装飾性が調和した廣業の《春海雪中松図》などが見どころである。



横山大観《黎明(れいめい)》 後期

絹本墨画淡色 1929(昭和4)年頃

巨匠は、生涯で「1500点」もの富士山を描いたとされ、「富士を描くということは富士にうつる自分の心を描くことだ。つまり、己を描くことだ。大観と言えど”富士“と言われる所以である。